

河政刃物で2大学の学生が鍛冶体験

12月10日(土)11日(日)の二日間、長岡造形大学の「木彫」を学ぶ学生らが6名、埼玉大学からは教育学部美術科「木彫」の学生らが13名、授業実習の一環として刃物鍛造の工程を学びたいと与板を訪れた。

越後特有の冬の荒天もモノとせず、ツナギの仕事着と手ぬぐい被りで支度万全の若者たち。炸裂するエアハンマーの音。そうでもなく狭い河政さんの鍛冶場は、人、人、人で身動きできないほど。

それでも真剣な眼で、真っ赤に熱した鉄の塊と飛び散る火花に食い入るように見つめる姿は、そばで見ている感動的であった。



長岡造形大の小林先生によれば、ご自身が武蔵野美大で彫刻の勉強をされていた時に、すでに与板の刃物は認知されていて、周囲のほとんどが与板の物を使っていたという話。ドイツに行き、自分の道具を見せると、あちらの学生たちが皆とても羨ましがったという話。そんな話を聞いてがぜん、このすばらしい技術を誇りにしなくては、と思う。学生たちも自らの手になじむ「切

出し」を造ろうと積極的にチャレンジしていたのが印象的だった。



ホドから引き出す鉄

埼玉大の横尾先生は、「ものづくりの技術継承は単に産業の問題というより、世代間の知恵の伝達と人間教育の問題だ。与板のしっかりした技術を、多様な場で種まきすれば、きっと根付き芽を出す可能性はある。」と、力をこめて語った。

学生の中には、すでに教職に就くと決めた若者もあり、「手で造り出すよろこびを子どもたちにも伝えたい」と話す。鍛冶屋になりたいという学生は残念ながら居なかったが、ここで得た鍛造技術の体験は、強く心に刻まれたようだ。

このたびの河政刃物さんの学生受入れに、休日返上でボランティア指導をして下さった、職人仲間の中野さん、高木さんご兄弟、小林さん、ありがとうございました。匠会としても大切なPR機会となりました。

